不登校児童・生徒の学校復帰に向けた援助に関する研究
―適応指導教室の取組みを通して―

山　口　芳　江

県内適応指導教室の指導員を対象に、適応指導教室の役割や学校復帰支援、学習指導の工夫についてアンケート調査を実施した。その結果、適応指導教室に望まれている役割は「心の居場所」が最も大きいことが分かった。また、不登校児童・生徒が学校復帰を果たすには、人間関係や学習についての不安が大きいことも分かった。そのため、適応指導教室では、児童・生徒一人ひとりに合った様々な支援を行い、児童・生徒の不安解消や自己肯定感の向上を図っていることが分かった。

また、フレンド学級におけるプリントを使用した学習指導において単元ごとの基礎・基本プリントを教材として提供することにより、「何を学習すればよいか」が分かり、満点のプリントや励ましの言葉、プリントをファイリングすること等により、達成感と自信、学習意欲を高めることが分かった。

〈キーワード〉　適応指導教室、指導員アンケート、心の居場所、学校復帰支援、学習指導

Ⅰ　主題設定の理由

文部科学省「平成20年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（小・中不登校の福井県の状況について）」によると、不登校児童・生徒の数は平成19年度に比べ、やや減少しているが、その出現率を見ると、小学校（0.32％）、中学校（2.61％）で前年と比べてほとんど変化が無く、不登校は依然として深刻な問題であると言える。こうした中にあって、不登校児童・生徒を支援する機関としては、学校や適応指導教室の他、総合福祉相談所や病院、特別支援教育センター、民間施設やＮＰＯ等があり、さらに、学校にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが派遣されるなど、多様化してきている。不登校児童・生徒を支援するためには、これらの関係機関の連携が不可欠であり、そのためには、お互いの特性や専門性を知り、確認しあうことが重要であると考える。

そこで、本研究では、適応指導教室の指導員のアンケート調査を通して、適応指導教室の特性や、専門性、望まれる役割とは何かを検討したいと考えた。また、不登校児童・生徒が学校復帰を目指す際に、障害となる要因を探し、適応指導教室の取組みを通して、効果的な学校復帰の支援にはどのようなものがあるか、特に学習指導の効果的な在り方について検討したいと考えた。

Ⅱ　研究の目的

1　県内適応指導教室における不登校児童・生徒への対応の実態、および学校復帰に関する指導員の意識について調査を行い、児童・生徒の学校復帰支援の現状と課題について明らかにする。

2　適応指導教室の実践を通して、児童・生徒の学校復帰に対する適応指導教室のよりよい支援の在り方を検討する。

Ⅲ　研究の方法

1　適応指導教室における不登校児童・生徒支援に関するアンケートの実施（資料１ p.52）

(1)　調査対象

県内適応指導教室の指導員（以下指導員と省略）

(2)　調査内容

指導員の属性と、不登校児童・生徒が学校復帰をする際の適応指導教室の取組みや課題について調査する。（適応指導教室によって、立地条件や通室生の人数が違ったり、通室生によって個人差が大きかったりするので、回答は現在の通室生についてだけではなく、指導員の今までの経験も含めて回答してくれるよう依頼した。）

２　アンケート結果の分析と考察

「指導員の属性」「適応指導教室の役割」「適応指導教室における学習指導」の３点についてアンケート結果を考察する。

３　フレンド学級における学習指導の実践と分析

福井県教育研究所フレンド学級における学習指導の実践から、適応指導教室におけるよりよい学習支援について考察する。

Ⅳ　研究の結果と考察

１　アンケートの回収と回収率

県内23適応指導教室中23教室、49人の指導員から回答があり、有効回答率は100％であった。ただし、設問によって回答に不備があるものについては分析対象から除いた。調査は平成21年10月下旬から11月中旬にかけて実施した。

２　アンケート結果の分析と考察

(1)　指導員の属性について

①　性別、年齢、経験年数

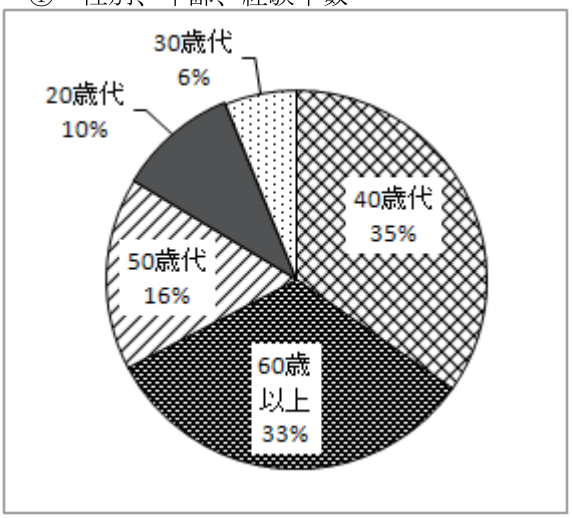


図１　指導員の年齢　（ｎ＝49）

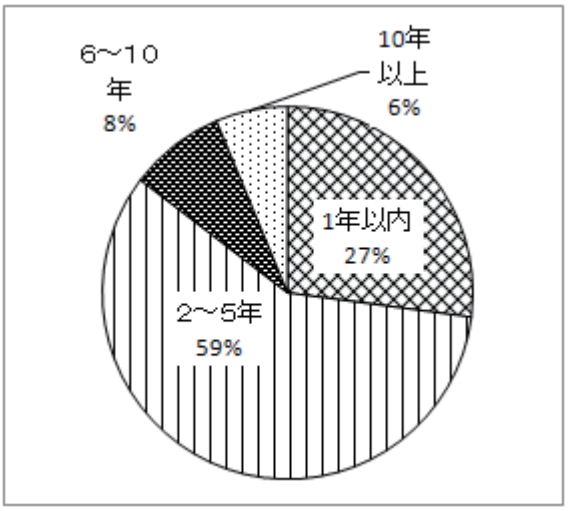


図２　指導員の経験年数　（ｎ＝49）

指導員の性別は、男性15名（31％）、女性34名（69％）であった。そして、年齢は40歳代が17人（35％）と一番多く、次に60歳以上が16人（33％）、50歳代が８人（16％）、20歳代５人（10％）、30歳代３人（６％）であった（図１）。また、指導員の経験年数は、２～５年が28人（59％）と一番多く、次いで1年以内が13人（27％）であった（図２）。これらのことから、適応指導教室の指導員は、40歳代以上の女性が多く、指導歴は５年以内が86％を占めることが分かった。

②　経歴と資格

指導員の持つ資格は、教員免許が一番多く、44名（90％）が保有している。その内、現職教員が10名（23％）、退職教員が16名（36％）であった。その他、非常勤講師経験有りが３名（７％）であった。合わせて、29名（66％）の指導員が、学校で指導した経験があることが分かる。教員免許の他、

11名が各種研究機関・団体によるカウンセラー資格を保有している（現在受講中も含む）。その他、資格・経歴として、保育士２名、特別支援教育士１名、塾講師１名、書道講師１名などがあった（複数回答）。

このように、指導員は教職経験者や教員の資格を持つ者が一番多い。このことから、適応指導教室は、学校についての知識や学習の指導において専門性を強く持っていることが分かる。不登校児童・生徒が、家庭から出て学校へ行く一歩手前の段階として、適応指導教室が適しているといえるだろう。また、カウンセラー資格を持っている指導員も多い。指導員になってからカウンセラー資格や臨床心理士の資格を取ることを目指す人もいることから、指導員は、児童・生徒や保護者の心のケアのためにより専門的な知識や技能を修得したいと考えていることが分かる。

(2)　適応指導教室の役割について

①　適応指導教室に望まれている役割

指導員が、普段、適応指導教室にどんなことが望まれていると考えているかについては、「心の居場所」が36人（73%）で、最も多かった。次に「学校と児童・生徒、保護者をつなぐ役割」が26人（53%）、「集団生活への適応支援」が24人（49%）、「基本的生活習慣の改善への支援」が16人（33%）であった（図３）。

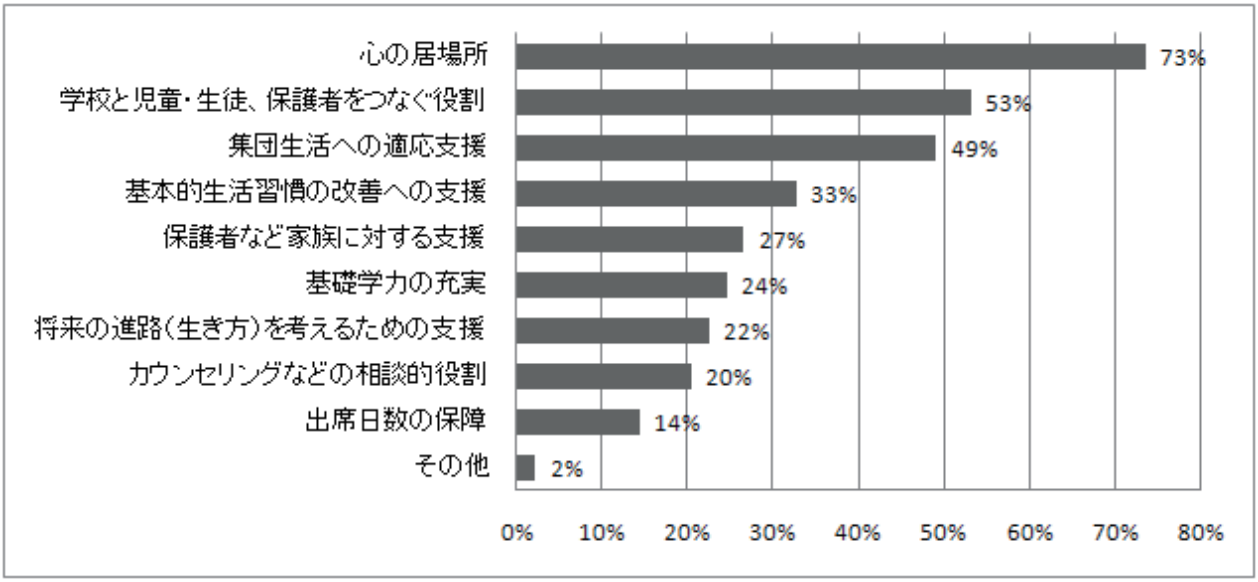


図３　指導員が考える適応指導教室に望まれている役割（複数回答）（ｎ＝49）

これらのことから、指導員は、適応指導教室は不登校児童・生徒の「心の居場所」としての役割が最も大切であると考えていることが分かる。また、児童・生徒の「心の居場所」が適応指導教室から学校へと広がっていくために、「学校と児童・生徒、保護者をつなぐ役割」が次に求められており、それと同時に、学校へ戻ってからうまく集団に適応できるように「集団生活への適応支援」も求められていると考えていることが分かる。

図４、図５は、平成20年３月に、福井県内の公立小中学校を対象に、福井県教育研究所教育相談課が行った「不登校児童生徒および不適応傾向児童生徒への支援に関するアンケート調査」の結果の一部である。不登校児童・生徒への支援に関して教員が適応指導教室に望むことについて、アンケート調査を行ったものである。この調査と図３のアンケート項目は一致させてある。

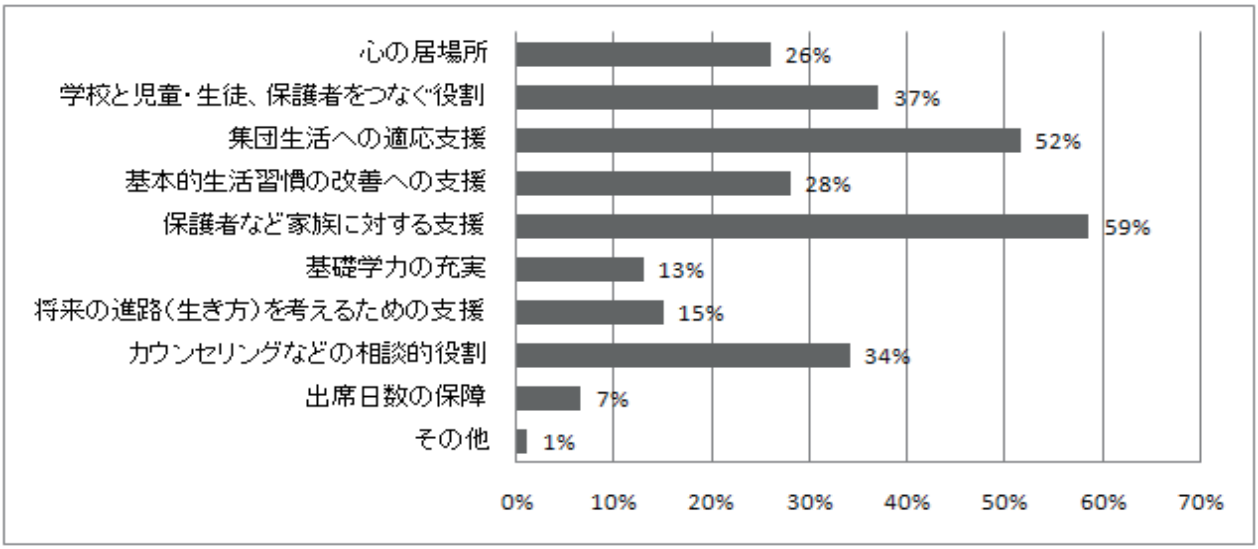


図４　不登校児童・生徒への支援に関して、適応指導教室に望むこと〈小学校〉（複数回答）（ｎ＝200）

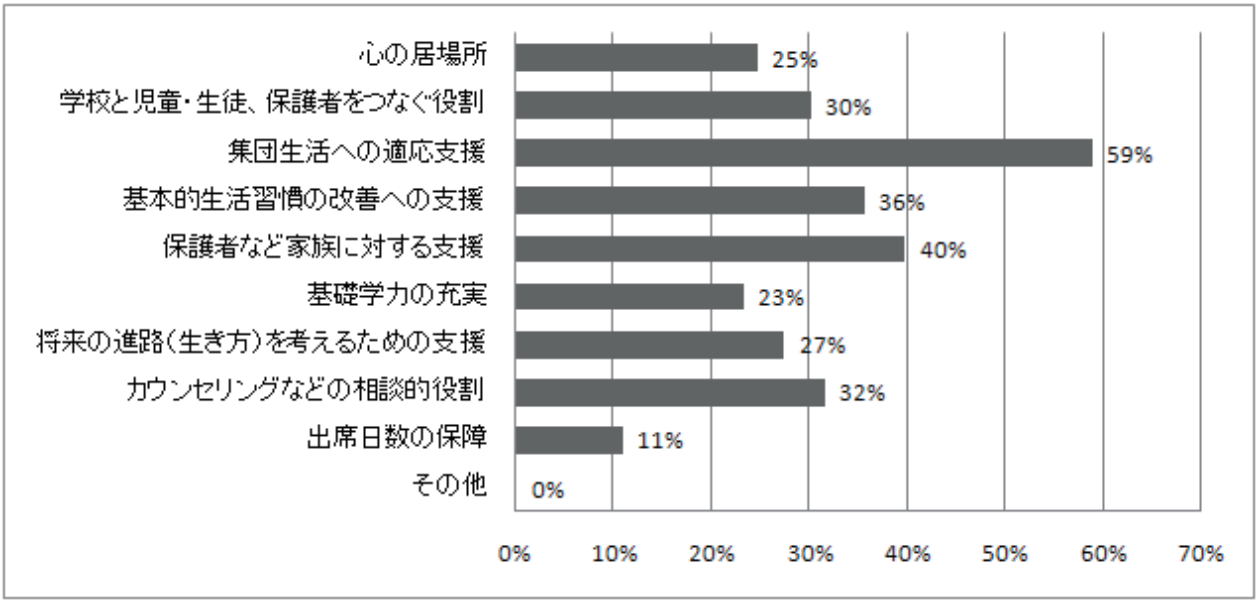


図５　不登校児童・生徒への支援に関して、適応指導教室に望むこと〈中学校〉（複数回答）（ｎ＝73）

指導員が考える適応指導教室に望まれる役割は「心の居場所」が最も多かったのに対し（73%）、図４、図５を見ると、小学校では「保護者など家族に対する支援」が200校中117校（59%）で最も多く、次いで「集団生活への適応支援」が103校（52%）で、「心の居場所」は52校（26%）であった。また、中学校では「集団生活への適応支援」が73校中43校（59%）で最も多く、次いで「保護者など家族に対する支援」が29校（40%）で、「心の居場所」は18校（25%）であった。

これらのことから、指導員が考えている適応指導教室の役割と、学校が望む適応指導教室の役割にずれがあることが分かる。これは、適応指導教室は、児童・生徒の学校復帰を念頭に置きながらも、まずは「心の居場所」を保障し、そこから保護者支援や適応支援を目指そうとしている一方、小中学校は、心の居場所づくりもさることながら、児童・生徒が学校復帰をするためには、保護者など家族に対する支援や集団生活への適応支援がより必要であると感じており、それを適応指導教室に期待しているということであろう。このことから、児童・生徒の学校復帰には、学校と適応指導教室が話し合い、お互いの目指すこと、お互いに望むこと等を理解し合い、連携して支援の方法を探すことが、大きな力になると思われる。

② 不登校児童・生徒の学校復帰支援について

適応指導教室でエネルギーをためた児童・生徒が、学校へ復帰しようとする際に障害があると感じるかどうかについて聞いたところ、「大いに感じる」と答えた指導員が44人中18人（41%）、「わりと感じる」が24人（55%）であった。「大いに感じる」と「わりと感じる」を合わせると、42人（95%）の指導員が障害を感じると答えている（図６）。無回答の指導員の中には、「個人差が大きく答えられない」という意見もあった。

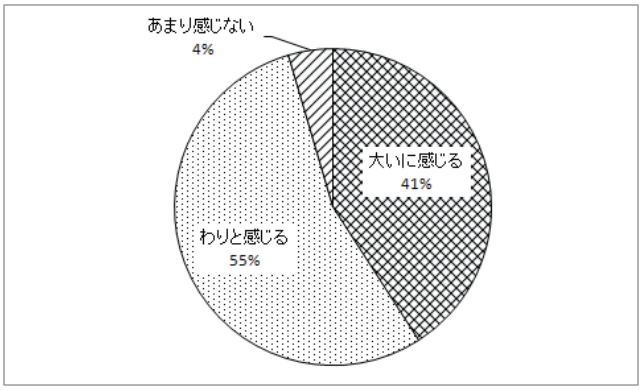


図６　学校復帰の際に指導員が感じる障害について（ｎ＝44）

次に、児童・生徒が学校復帰の際に感じる障害の原因について、図７のような質問をした。①から⑤の設問に対し、それぞれどのくらい障害を感じるかを１から５のスケールで回答してもらった。それぞれの設問の、４と５を選んだ人数を合計した結果が図８である。障害を感じる原因として最も多いのは、「教員・友人関係への不安」（89%）で、次に「自分に対しての自信のなさ」（71%）、「学習の遅れへの不安」（62%）であった。「学校で受け入れてくれる人がいるのだろうか。」「自分が学校に入っていけるのだろうか。」「授業についていけるのだろうか。」という不安を、児童・生徒はもっており、延いてはそれが児童・生徒の自信のなさにつながっていると指導員は感じているようである。

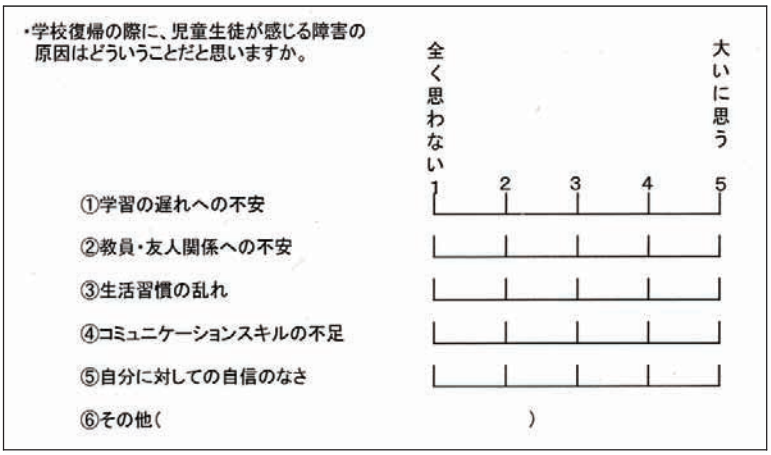


図７　学校復帰の際に児童・生徒が感じる障害の原因についての設問

その他で記述のあったのは、「適応指導教室と学校との温度差」「集団からの威圧感 」「学校との連携不足」などであった。

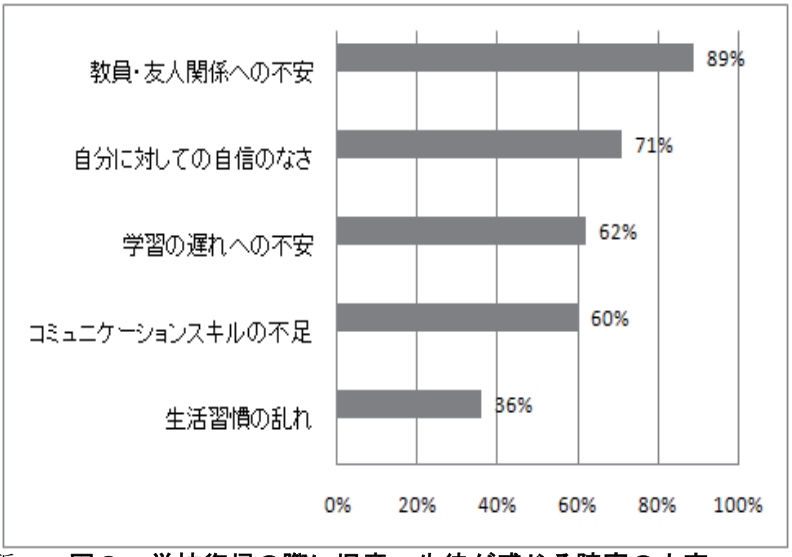


図８　学校復帰の際に児童・生徒が感じる障害の内容（複数回答）（ｎ＝45）

これらの結果から、安心できる場所であり心の居場所であった適応指導教室から学校へ戻る際に、人間関係や学習の遅れに対し不安に揺れる児童・生徒の姿が浮かび上がってくる。児童・生徒がスムーズに学校へと馴染んでいけるように、適応指導教室と学校は密に連携し合い、少しでも不安が少なくなるように支援が必要であることが分かる。

それでは、児童・生徒の学校復帰のために、適応指導教室はどのようなことに力を入れているのであろうか。力を入れている取組みや、工夫している取組みについて質問した（自由記述）。

その回答では、学校・担任・保護者との連携をあげた指導員が一番多かった。具体的には、以下の通りである。

（学校・関係機関との連携について）

・学校復帰を勧めるタイミングや言葉掛け及びその方法を、学校とよく相談したり、打ち合わせしたりする
・移行支援会議のようなケース会議を事前に開いて、復帰後の対応について学校と具体的な打ち合わせを行う。（これまでの適応指導教室での取組みについて話し合い、学校で活かせるものは活かしていく。）復帰後も、児童・生徒の様子を確認し、随時対応の仕方について検討している。
・学校に様子を伝え、登校方法を相談する。場合によっては付き添う。児童・生徒に、学校と適応指導教室を自由に行き来して良いことを普段から伝えておく。等

（学校との交流について）

・担任との交流会を催し、児童・生徒が学校に行きやすくする。
・折に触れて学校の様子を話す。（学年だより等を参考にして）
・子どもの調子の良いときに担任に来室してもらう。（学校内にある適応指導教室の取組み）等

（学習支援について）

・基礎学力の定着を図り、学校復帰の際に自信をもたせる。
・復帰後スムーズに授業についていけるように、学力の補充をする。
・児童・生徒が、自分の力を試しに学校へ行きたいと思えるように、学習指導をする。等

その他、ソーシャルスキルの練習の時間を設けたり、学校復帰のためのチャレンジ期間の設定、クラスメートとの交流を図るなどの記述が見られた。

これらのことから、適応指導教室では、学校復帰に際し、児童・生徒の不安を解消し自信をもたせるいろいろな取組みを行うと同時に、児童・生徒がスムーズに復帰できるように、学校との連携を図り、支援を行っている様子が窺える。しかし、学校、適応指導教室共に、多忙化と人員の不足等で十分に連携が図れないのも現実である。

(3)　適応指導教室における学習指導について

①　学習時間の設定について

適応指導教室における学習時間については、「児童・生徒の状況に合わせて適切な時間を設けている」も含めるとすべての教室に設定されている。どれくらいの時間学習するかは、児童・生徒の実情に合わせているので個人差があったり、学校内に適応指導教室がある場合など、設置状況によっても異なるが、１時間30分～２時間が10教室あり、全体の44％であった。次に、１時間～1時間30分が４教室で、17％であった（図９）。

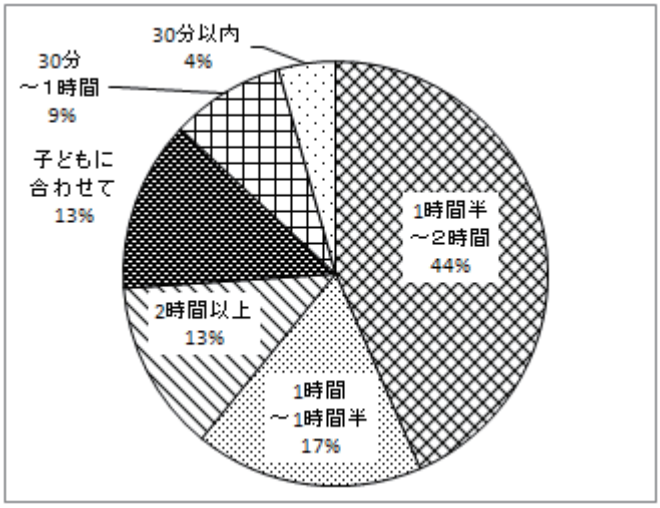


図９　適応指導教室における学習時間

② 学習指導のねらいについて

適応指導教室における学習指導のねらいについては、「学習に対する不安の解消」が40人（83%）で最も多く、次いで「自己肯定感を高めること」が31人（65%）であった。学力をつけることで、児童・生徒の不安を解消し、自己肯定感を高め、学校復帰への意欲を高めることが大きなねらいであると思われる。先述の通り、学校復帰に際し児童・生徒が感じる壁は、人間関係や学習への不安が大きいと、指導員は感じていることが分かった。その不安を少しでも解消することが、学習指導でもねらいとされるのだと考えられる。また、基礎学力を定着させることは、児童・生徒に分かる喜びを味わわせるとともに、学習に対する不安を解消し、自己肯定感を高めることにもつながるだろうと予想される（図10）。

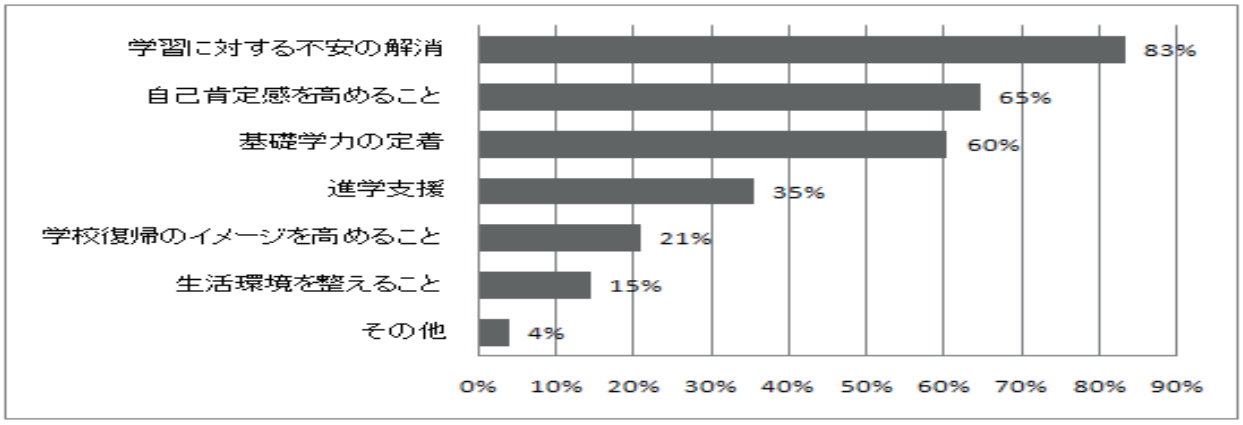


図10　適応指導教室における学習指導のねらい（複数回答）　（n＝48）

③ 学習指導をする上での課題

適応指導教室の児童・生徒に対し、学習指導をする上での課題と感じられることについては、「児童・生徒の学習に対する意欲が足りない」が23人（48%）で最も多く、次いで「個人差が大きく、指導がしにくい」が22人（46%）であった。子ども個人の問題が一番大きな課題であるといえる。次に、「学校との連携がなかなかできない」が18人（38%）、「指導員の数が足りない」が14人（29%）、「指導員に学習内容に対する専門性が少ない」が13人（27%）と指導員の数や専門性の問題が続く。「良い教材が無い」９人（19%）では、適応指導教室の備品や教材の不足から、理科の実験等ができないとの声があった。その他の記述では、「個に応じた教材の工夫」や、「学習意欲の低い児童・生徒への学習内容が提供できない。」「学習に集中するほどの元気がない。学校や学習のことを考えたくない様子のときもある。」「学習の量が確保しにくい。」など、児童・生徒一人ひとりに応じた学習指導を目指すものの、子どもの様子や指導員数の不足、教材や時間の確保などの問題で課題を抱えている様子が窺える（図11）。

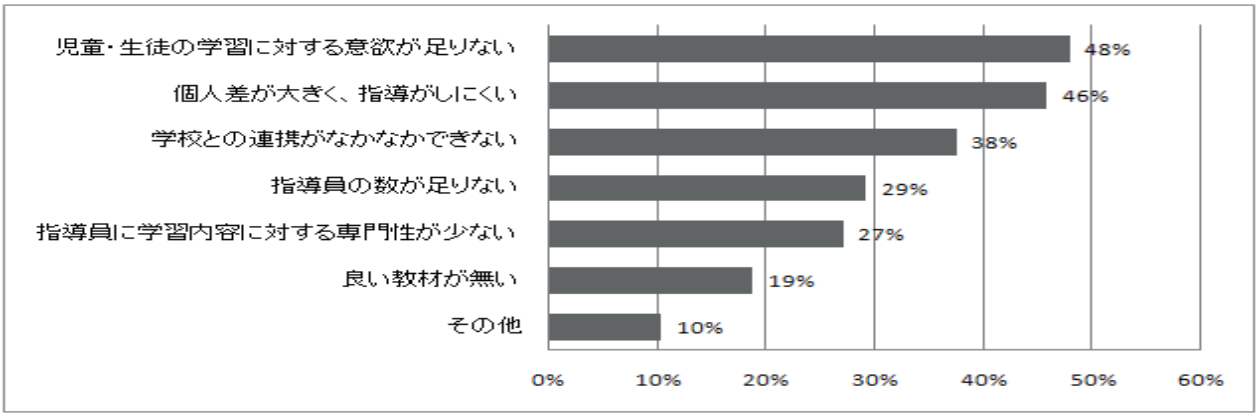


図11　適応指導教室で学習指導をする上での課題（複数回答）　（n＝48）

④　学習指導について力を入れている取組みについて

では、学習指導をする上での課題を解消するために、適応指導教室はどういう工夫をしているのだろうか。適応指導教室での学習指導について、力を入れていることや工夫していることについて質問した（自由記述）。最も多かったのは、「児童・生徒の個に応じた学習」についてであった。

具体的には、以下の通りである。

（個に応じた指導について）

・児童・生徒の在籍している学年からではなく、つまずきはじめた学年からおさらいするようにし、抵抗感を取り除く。
・個別指導を中心に、一人ひとりの能力に合った学習法を見つけること。また、他人と比べず、個人内評価を行う。
・本人の実態に応じた教材を用意して、できることの喜びを味わわせるようにしている。等

（基礎学力の定着）

・単発的な学習指導ではなく、毎日の積み重ねによる学力の定着や系統性を大切にしている。
・内容を進めることに重点を置かず、繰り返し確実にできるように支援をしている。等

（意欲を高める・自信をもたせる）

・学習に対する意欲が出せるような工夫（本人のプライドを傷つけないように）をしている。
・子どもたちが「ほめられる」体験から次の意欲につながるような言葉掛けをしていきたい。
・完成できたことや努力の跡がみられることについて共に喜び、後の意欲付けにつながるように言葉掛けをしている。等

（楽しい・丁寧な指導）

・楽しく、変化のある指導と、分かりやすい指導を心がけている。
・一つひとつ、丁寧な指導をする。子どもの疑問を大切に、学習に対する意欲や自信を高めるようにしている。等

（本人の意思・自主性の尊重）

・本人のやる気をまず第一に考えている。自分がやろうと思うものからやっている。
・児童・生徒の興味や関心を中心にして進め、学習へと発展するように工夫した。等

（満足感・達成感を味わわせる）

・「できた」という満足感、達成感を味わうことができるように進めていく。等

（学校に合わせた指導）

・教科の進度や教材など、学校からの情報をまめに取り入れる。等

その他、「他の通室生に知られないように個別の学習場所を設定している。」「学習習慣をつける」等の記述があった。

これらのことから、適応指導教室では、児童・生徒一人ひとりの実態に合わせ、教材を用意したり、カリキュラムを組んだりして、個別支援をしていることが分かる。また同時に、児童・生徒の気持ちを大切にして満足感・達成感を味わわせたり、本人の意思や自主性を尊重しながら意欲の向上を図ったりして、自信をもたせようとしていることが分かる。

3　フレンド学級における学習指導の実践と分析

(1)　フレンド学級の学習指導のねらい

福井県教育研究所フレンド学級では、学習に対する不安を感じている子どもたちに、自分のペースを大事にしながら、学ぶ喜びやできた喜びを実感し、その中で学習習慣を身に付けながら、学習への不安を軽減することをねらいに学習指導を行っている。個別学習を基本にしているが、時には一斉授業も取り入れて、集団で学ぶ楽しさも味わえるようにしている。

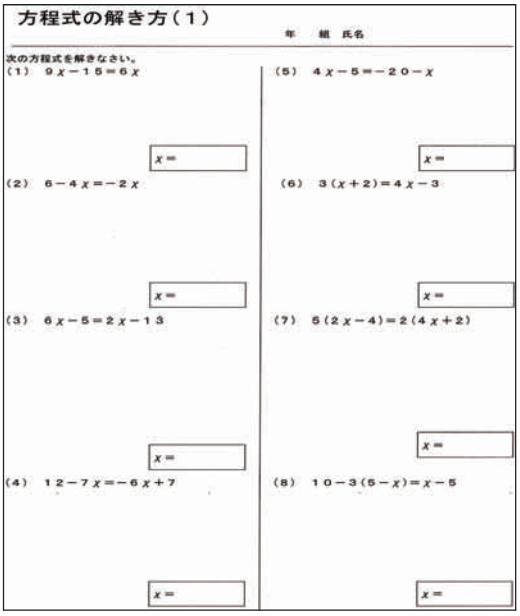
(2)　学習指導（プリント学習）の方法

・50分間のうち、最初の15分間をプリント学習に充てる。
・分からないところは、スタッフに自由に質問する。
・プリントが完成したら、近くのスタッフはその場で採点をする（赤ペンで）。
・間違っているところは、×をつけるのではなく、直した後〇をつけて100点にして返す。
・自信の回復が目的なので、どのプリントをやるのか等は児童・生徒の選択にまかせる。

(3)　教材について

教材は、「福井県教育研究所教材研究支援システム」中の教材・教具のプリント（以下教材プリントと省略）を使用した。この教材プリントを使用した理由は、下記の通りである。

・各教科ごと、単元ごとに基礎・基本の問題が記載されているので、どこをやるのかが分かりやすい。
・１枚のプリントをやるのに、５～10分ぐらいでできるように設定されているので、無理なく取り組める（図12）。
・ＨＰからダウンロードして使用できるので、無償であり、金銭的負担が小さい。


方程式の解き方（１）

年　組　氏名

次の方程式を解きなさい。

(1)　$9x-15=6x$　　$x=$

(2)　$6-4x=-2x$　　$x=$

(3)　$6x-5=2x-13$　　$x=$

(4)　$12-7x=-6x+7$　　$x=$

(5)　$4x-5=-20-x$　　$x=$

(6)　$3(x+2)=4x-3$　　$x=$

(7)　$5(2x-4)=2(4x+2)$　　$x=$

(8)　$10-3(5-x)=x-5$　　$x=$

図12　教材プリント（例）

(4)　実施期間と対象者

・期間　　2009年５月～８月（前期フレンド学級）
・対象生徒　　フレンド学級在籍生徒（中学生11名）

(5)　結果と考察

①　児童・生徒の様子

昨年までは、児童・生徒の用意した教材を使って、学習を進める形態が主であった。これは、児童・生徒の自主性や意欲に合わせることを目的としているものであったが、反面、漢字の書き取りばかりをしていたり、何を学習していいのか分からなかったりする児童・生徒の姿も見られた。そこで、昨年度より、児童・生徒の学習への興味を引き出す工夫として、教材プリントを取り入れた。今年度から、本格的に取り入れ、学習の時間（マイスタディタイム）の最初の15分間は、教材プリントの中から、児童・生徒自身がやりたいものを選び、取り組むようにした。その際に、現在の自分の学年にこだわらず、できるものから選ぶようにアドバイスした。また、同じプリントを何枚もやって力を定着させることを勧め、自分一人の力で、100点がとれたことを実感できるようにした。15分が過ぎたら、自分の用意した教材に取り組んでも良いし、引き続き教材プリントに取り組んでも良いことにした。児童・生徒が取り組んだプリントは、その場で指導員が採点し、間違っているところはいっしょに直し、必ず100点にして励ましの言葉とともに児童・生徒に返すようにした。それを、各自のプリントファイルにつづり、後で自分の頑張りを振り返ることができるようにした。100点のプリントがどんどんたまっていくことで、達成感を味わわせ、学習に対する自信をもたせ、意欲の向上を図った。

児童・生徒は、最初、現在の自分の学年にこだわらずに教材プリントを選ぶということにとまどいを感じている様子も見られたが、指導員のアドバイスを受けて、自分で選ぶことができるようになっていった。また、自分の現在の学力を人に知られることに抵抗を感じる児童・生徒もいたが、できなかったことができるようになり、達成感を味わううちに、抵抗感が薄れていく様子が見られた。通級生同士がお互いの頑張りを褒め合う姿も見られるようになった。この期間の児童・生徒が取り組んだプリントの枚数を平均すると、個人差は大きかったが１回のスタディの時間に５～６枚のプリントに取り組めていた。

また、プリント学習を通して、指導員も児童・生徒の学力がどのくらいなのか、ある程度推察することができた。これは、児童・生徒にアドバイスをしたり進路指導をしたりするときに、重要な手がかりとなると思われる。

② 学習に関する自信度アンケートから

前期フレンド学級が始まる５月と、終了する８月に、学習に関する自信についてのアンケートを行った。このアンケートは、児童・生徒が各教科に対して、それぞれどのくらい自信があるかを０から10のスケールで表したものである（図13）。

アンケートの結果を、個人別に合計して比べたものが図14、図15である。フレンド学級生のうち、５月、８月ともにアンケートができた６人（Ａ、Ｂは中３生、Ｃ、Ｄ、Ｅは中２生、Ｆは中１生）について比べてみた。

その結果、５月のアンケートでは、個人差が大きく、６人の生徒の５教科（国語・社会・数学・理科・英語）に対する自信度の平均は、50点中11点であった（図14）。図15は、同じアンケートを８月に実施したものである。ほぼ６人全員の点数が上がり、自信度の平均は50点中13点となった。

教科については、数学、社会の上昇率が高い。これは、マイスタディタイムの時間中に、生徒の取り組んだプリント数とも関係があると思われる。

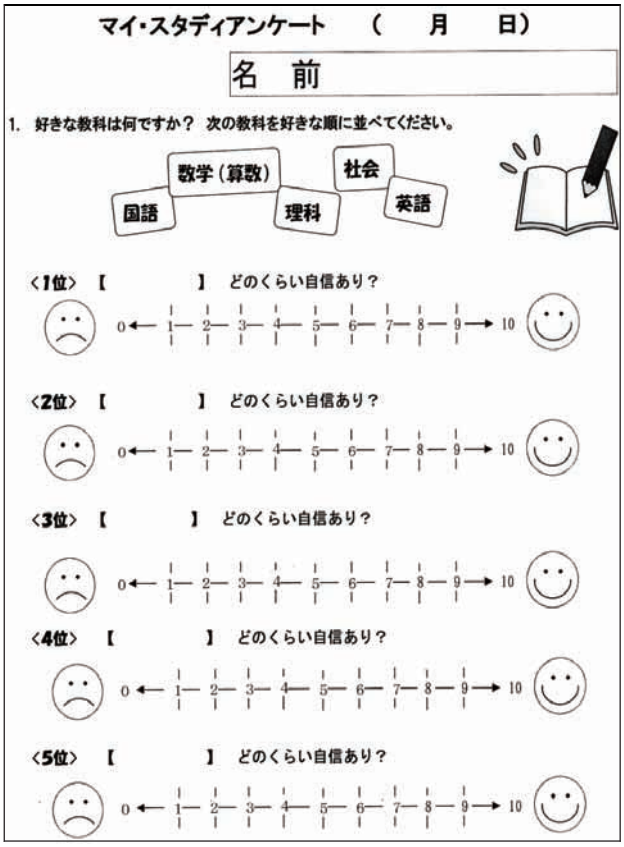


図13　学習に関するアンケート

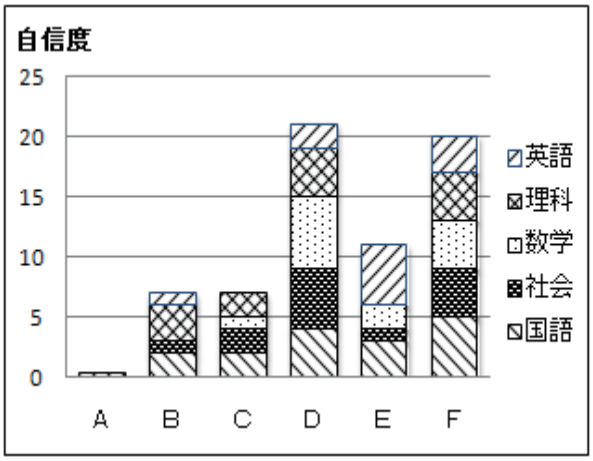


図14　学習に関するアンケート〈５月〉

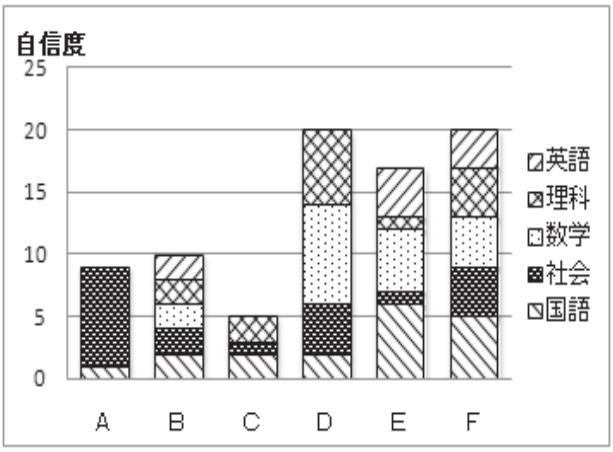


図15　学習に関するアンケート〈８月〉

また、理科、英語については、上昇率が低かった。その理由としては、理科については 、実験・観察等ができず、プリントだけでは自信がつかないことが考えられる。これは、アンケートの際の「やりたいこと」についての児童・生徒の記述に「理科の実験がやりたい。」とあったことや、先述の適応指導教室指導員アンケートの、学習指導をする上での課題に、「器具や教材がなく、実験ができない」との声が挙がったことからも推察される。英語については、中学校から習う教科であるため、生徒が学校で授業を受けた経験が少なく、その分、「授業を受けていない。」という気持ちが大きく、自

信のなさにつながっていると思われる。

８月のアンケート中での、「以前と変わったことはありますか。」の問いに対して、「集中してできるようになった。」「家の人に教えてもらって少しずつやるようになった。」「勉強がちょっとだけ楽しくなった。」などの意欲が向上した記述が見られた。反面、「学習について、不安なことはありますか。」の問いに対して、「英語と数学がすごく不安」「社会以外は全然できない」「学校の授業についていけない」などの具体的な不安が書かれており、特に苦手な教科の基礎学力の定着には至っていないことが分かる。

次に、図14、図15の６人のうち、自信度が10点以下のＡ、Ｂ、Ｃの個人の結果について考察してみた。

〈Ａさん（中学３年生、不登校歴　２年１ヶ月）〉

５月のアンケートでは、国語が0.3点のみで、残りはすべて０点であった。昨年から、指導員が学習を勧めても、「どうせできないから」と、なかなか真剣に取り組むことができなかったが、今年度になってから、社会科の「公民」に興味を示し、ずっと社会のプリントを選んでやるようになった。プリントの他、公民の問題集を持参し、進んで取り組むようになった。８月のアンケートでは、社会が８点に伸び、「やろうと思えば自分もできるんだ。」という言葉がでるようになった。しかし、国語、社会の２教科以外は、学習に取り組まず、０点のままである。基礎学力の定着の面からは、まだまだ問題があると言える（図16）。

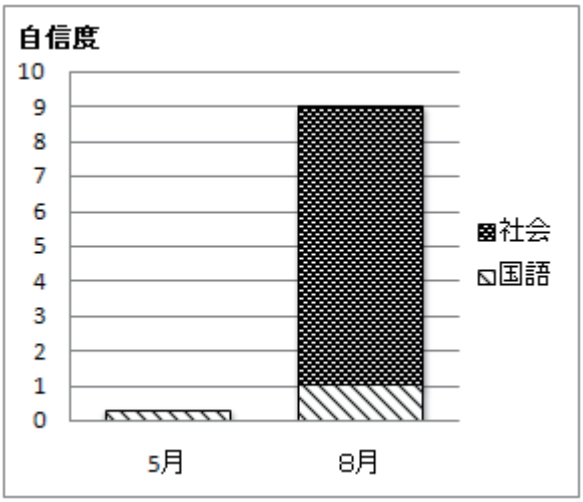


図16　学習に関するアンケート（Ａさん）

〈Ｂさん（中学３年生、不登校歴　２年３ヶ月）〉

昨年までは、学習の時間はいつも漢字の書き取りをしていた。他の学習を勧めても、なかなか取り組もうとしなかった。今年度になり、中学３年に進級したこともあり、学習に関して不安が大きくなったようである。５月のアンケートでの「学習について、不安なことはありますか。」の問いに対し、「中学の数学がまったく分からない。」と書いていた。そこで、数学の計算問題を中心に取り組み、その都度励ましの言葉を掛けるようにした。８月のアンケートでは、自信度も全体で３点上がり、特に数学が０点だったものが２点に上がった。「以前と変わったことはありますか。」の問いに、「数学の式をていねいに書けるようになった。」と、前向きな言葉を書いていた。反面、「数学に取り組むようになり、他の教科も全然できないことに気づいた。」と話すようになり、以前と違う不安を感じるようになったようである。しかし、現実に向き合うことは成長の証しでもあり、今後、自信をもてるようにさらなる支援が必要であると考える（図17）。

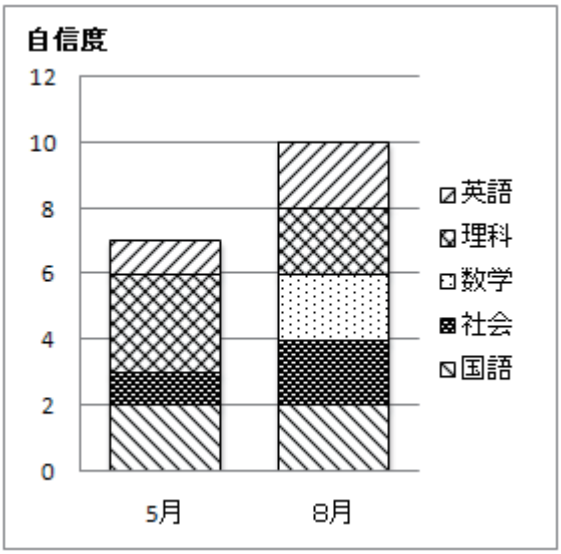


図17　学習に関するアンケート（Ｂさん）

〈Ｃさん（中学２年生、不登校歴　２年11ヶ月）〉

学習態度も良く、プリントにも集中して取り組んでいる。理解も早く、能力も高いと思われる。しかし、なかなか学習意欲に結びつかず、指導員が勧めても、次の学習へと進めることがむずかしい。８月のアンケート結果を見てみると、５月よりも点数が下がっている（図18）。

Ｃさんは、学習だけでなく、全体的に自己肯定感が低い傾向がある。そのため、学習に対する意欲もなかなか向上しないと予想される。今後は、学習だけでなく、いろいろな体験活動や友人、指導員との触れ合いを通して自信をつけていくことを目指すことが大切であると考える。

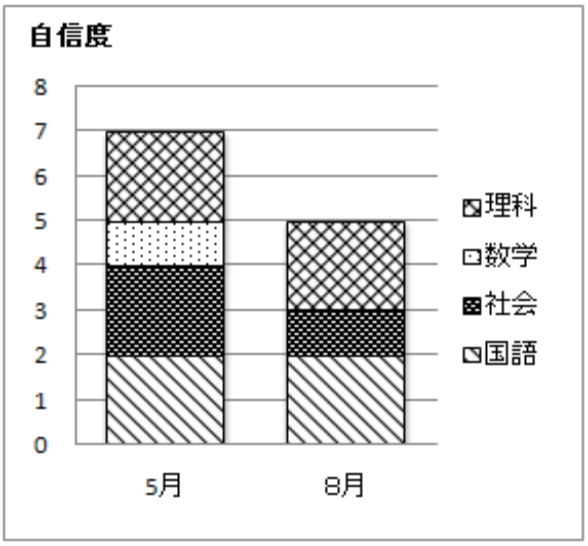


図18　学習に関するアンケート（Ｃさん）

これらのことから、フレンド学級での教材プリントを使用した学習指導は、児童・生徒の「何を学習していいか分からない。」「どのくらいできるのか分からない。」といった不安の解消に、ある程度役立ったと思われる。少しずつではあるが確実に増えていく100点のプリントに達成感や充実感を味わったり、100点を取る度に指導員から励ましの言葉を掛けられたりしたことも自信をつけるのに有効であったのではないかと考える。また、自分の得意科目を自覚することが自信につながるとともに、その教科の学力の定着も期待できると思われる。さらに、個々のプリントファイルは、学校へ行き担任に見せることで自分の頑張りを示すと同時に、担任にとっては児童・生徒の学力を知る重要な資料になると考えられる。そうした取組みが、学校復帰の際の児童・生徒の不安解消にもつながるのではないだろうか。

しかし、学年相応の学力の定着という点では、まだまだ課題が多い。児童・生徒の興味や自主性を重んじ、児童・生徒のやりたいことを優先するために、いつまでも苦手な教科の学習が進まないということが出てくる。その際には、児童・生徒の興味や自主性を重んじながらも、他教科の学習にも意欲が高まるように根気強い励ましと働きかけが必要であると思われる。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

今回の研究で、福井県の適応指導教室は、指導員に教員免許保有者や教職経験者が多いことが分かった。このことから、適応指導教室は、学校に準じた学習活動や集団適応のスキルを学ぶのに適しているといえる。一方で、適応指導教室は児童・生徒の「心の居場所」であることが最も大切な役割であると、指導員は考えていることが分かった。また、児童・生徒が学校復帰を目指す際には、大きな不安を持ち、特に「人間関係」「自分自身のこと」「学力」についての不安が大きいことが分かった。これらのことから、児童・生徒は、適応指導教室に「心の居場所」を保障してもらいながら、学校へと目を向け、学校にも「心の居場所」を広げていくことで、スムーズに学校復帰していけるのではないかと思われる。そのためには、学校と適応指導教室が、お互いのことを理解し、情報を共有し、連携していくことで、児童・生徒の不安が軽減され、スムーズな学校復帰につながるのではないだろうか。

各適応指導教室は、立地条件や指導員の数、通級生の数など、取り巻く状況がそれぞれ異なる中、学校や他の機関と連携しながら、一人ひとりに合わせて、学校と児童・生徒及び保護者の間に入って、様々な取組みを行っていることが分かった。これは、児童・生徒の「心の居場所」を保障するとともに、学校や地域にも「心の居場所」を広げることを目指す活動であるといえるだろう。

また、適応指導教室での学習指導においては、「学習に対する不安の解消」「自己肯定感を高めること」「基礎学力の定着」を大きなねらいとしていることが分かった。これは、学習を通じて、児童・生徒が「やればできる」という自信や、「受け入れてくれる人がいる」という安心感、「ついていける、うまくやっていける」という見通しを身に付けることを目指していると思われる。しかし、子どもの様子の違いや教材、時間の確保等の課題を抱えており、基礎学力の定着にはなかなか至らないケースが多い。今後は、児童・生徒の学習意欲の向上に有効な指導の在り方や、学校との連携による学習指導の在り方等、不登校児童・生徒へのより適切な支援の在り方を探っていきたい。

最後に、県内適応指導教室の指導員の方々には、お忙しい中アンケート調査に御協力を頂き、心から感謝申し上げます。

《引用文献》

○福井県教育研究所　「平成19年度適応指導広域支援センター事業報告書」pp14-15

《参考文献》

○上里一郎監修　相馬誠一編(2007)「不登校-学校に背を向ける子どもたち-」ゆまに書房
○岩佐明晴（2007)「適応指導教室における連携について」『研究紀要』第112号、福井県教育研究所、pp.41-50
○河本肇（2002)「適応指導教室の目的と援助活動に関する指導員の意識」『カウンセリング研究』第35巻、第２号、日本カウンセリング学会、pp.97-104
○兵庫県不登校研究会編（2009)「不登校の子どものための居場所とネットワーク」学事出版
○堀洋道監修　山本眞理子編（2001)「心理測定尺度集Ⅰ」サイエンス社
○米田薫（2005)「適応指導教室は機能や力量を見極めて活用しよう」『月刊学校教育相談』2005.９月号、ほんの森出版、pp.22-25

（資料１） No. 1

不登校児童生徒の学校復帰に向けた援助に関するアンケート

福井県教育研究所研究員　山口　芳江

貴適応指導教室名（　　）

このアンケートにより、個人や適応指導教室を評価することはありません。御協力の程、よろしくお願いいたします。以下の質問について、あてはまる番号に○を付けて下さい。

Ⅰ　指導員の方ご自身について質問します。

1　あなたの性別について、該当するものに○を付けてください。

①男　　②女

2　あなたの年齢について、該当するものに○を付けてください。

①20歳代　②30歳代　③40歳代　④50歳代

⑤60歳以上

3　適応指導教室における、あなたの指導歴は何年ぐらいですか。該当するものに○を付けてください

①1年以内　②2～5年　③6～10年　④10年以上

4　あなたの経歴や資格について、該当するものすべてに○を付けてください。

①現職教員　②退職教員　③教員免許あり　④臨床心理士

⑤社会福祉士　⑥精神保健福祉士　⑦精神科医

⑧各種研究機関・団体によるカウンセラー資格

⑨その他（　　）

Ⅱ　適応指導教室の役割について質問します。

1　あなたの教室の通級生の数を教えてください。

小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
人	人	人	人	人	人	人	人	人

2　不登校児童生徒に対する支援として、適応指導教室に特に望まれている役割は何だと思いますか。該当するものの中から3つに○を付けてください。

①出席日数の保障　②基礎学力の充実

③基本的生活習慣の改善への支援　④集団生活への適応支援

⑤将来の進路（生き方）を考えるための支援　⑥心の居場所

⑦カウンセリングなどの相談的役割　⑧保護者など家族に対する支援

⑨学校と児童・生徒、保護者をつなぐ役割

⑩その他（　　）

No. 2

3　適応指導教室が担う役割の中で、あなたが最も大切だと思うことは何ですか。具体的にお答えください。

4　児童生徒が、適応指導教室から学校へ復帰しようとする際の障害について、あなたはどの程度感じていますか。

①大いに感じる　②わりと感じる　③あまり感じない　④まったく感じない

※　4で①②のいずれかに回答した方にお聞きします。

・学校復帰の際に、児童生徒が感じる障害の原因はどういうことだと思いますか。

	全く思わない 1	2	3	4	大いに思う 5
①学習の遅れへの不安					
②教員・友人関係への不安					
③生活習慣の乱れ					
④コミュニケーションスキルの不足					
⑤自分に対しての自信のなさ					

⑥その他（　　）

5　子どもたちの学校復帰のために、力を入れている取り組みや、工夫している取り組みなどについて、具体的に教えてください。

Ⅲ　適応指導教室における学習指導について質問します。

1　あなたの適応指導教室では、学習の時間がありますか。

①ある　②ない

③プログラムに学習の時間はないが、子どもの状況に合わせて適切な時間を設けている

No. 3

※　1で①③と回答した方にお聞きします。

・一回の活動につき、どのくらいの時間学習しますか。

①30分以内　②30分～1時間

③1時間～1時間30分　④1時間30分～2時間

⑤2時間以上（　　時間）　⑥子どもに合わせて取っており、決まっていない

2　適応指導教室における学習指導のねらいは何だと思いますか。該当するものに○をつけてください。（3つまで）

①学習に対する不安の解消　②基礎学力の定着

③自己肯定感を高めること　④学校復帰のイメージを高めること

⑤生活習慣を整えること　⑥進学支援

⑥その他（　　）

3　学習指導をする上での課題とは何だと思いますか。該当するものに○をつけてください。（3つまで）

①個人差が大きく、指導がしにくい　②児童生徒の学習に対する意欲が足りない

③指導員に学習内容に対する専門性が少ない

④良い教材が無い　⑤指導員の数が足りない

⑥学習に関しての情報交換など、学校との連携がなかなかできない

⑦その他（　　）

4　学習指導について、力をいれていることや、工夫していること、気をつけていること等について具体的に教えてください。

※質問は以上で終わりです。御協力ありがとうございました。